

# 清河八郎 「西遊草の道」

「元気・まちネット」踏査同行記

5



清河八郎の旅日記「西遊草」の県内ルートを探る東京のNPO法人「元気・まちネット」(矢口正武代表=戸沢村出身)の踏査隊は鬼坂峠を下り、鶴岡市菅野代に着いた。

「西遊草」(東洋文庫)には「菅野代の村役人榎本万太郎の家に泊まる」とあり、八郎が庭の池に群がっているコイに餌を与えて楽しんだことや、とろろ芋がおいしかったこと、周辺がシイタケの産地だったことなどが書かれている。

「村役人榎本万太郎」の子孫の家は菅野代に残っていた。今は空き家だが、市内に住む所有者が時折足を運んでいる。その家族に聞くと、もともと敷地の広い家で、出羽

## 整然と並ぶ家々

# 今も残る宿場の面影



家並みに宿場の面影が残る鶴岡市小国の旧街道を歩く踏査メンバー

二山に参拝に来た講の人などが泊まったという。清河八郎がコイに餌をやった池は、数年前の水害で土砂に埋まってしまった。

この後、隊員らは温海川、木野俣を経て同市小国に向かった。八郎は温海川の印象を「四方に青々と山や谷を巡らし、山間の眺めのよい村である」と書いた。八郎親子は木野俣を通り過ぎた辺りで小国の関所役人畑田安吉の出迎えを受け、安吉の家で昼食を取った。

小国は江戸時代、庄内五関の一つとして庄内藩が番所を置いた。1702(元禄15)年の「小国村絵図」を見ると、村の南端に小国口番所があり、街道の両側に同じ大きさ

の61軒の家が整然と並んでいる。

小国の家並みには今でも宿場の面影が色濃く残る。踏査隊は、旧街道沿いに立つ関所跡の標柱を確認。自治会長の五十嵐俊司さん(61)によると「庄内藩が計画的に区割りをして宿場をつくった。関所には藩士が常勤し、だんな屋敷と呼ばれる家に住んでいた。」

「西遊草」で八郎たちを迎えにくる「安吉」は、八郎の少年時代の恩師畑田安右衛門の長男。五十嵐さんから番所に勤めた藩士の記録を見せてもらったが、安吉の名前を見つけたことはできなかった。

「昭和30年代までは、かやぶき屋根の宿場で知られる大内宿(福島県)と同じ景色が

ここで見られた」と五十嵐さん。街道沿いの各家の間口の広さは、ほぼ昔のままという。

踏査隊は小国から歩いて角間台峠へ。道は廃道になっていたが昭和50年代に改良工事が行われたという。峠の先は小名部。藩政時代はここにも番所があり、小国と一重で人や荷物を検問していた。

そこからさらに新潟県境の堀切峠へと歩く。峠道はアブが多く、マムシもはい出て隊員らを驚かせた。堀切峠に達すると「庄内藩主酒井忠勝公が信州より入封のとき、堀切峠を越え小鍋(小名部)村にて昼食をとった」などと書かれた説明板が立っていた。

新潟県側に峠を下ると村上小俣に到着。八郎は「小俣村まで努力してたどり着き、佐藤吉左衛門という家に泊まる」と「西遊草」に書いた。小俣もまた宿場の雰囲気が残る地域で、家々に屋号を書いた看板を掲げている。

踏査隊は八郎親子が泊まった「佐藤吉左衛門」の屋号を継いでいる家を見つけた。小俣の歴史に詳しい地元佐藤伊勢男さん(87)は「吉左衛門は江戸時代に旅籠(はたご)をしていた。清河八郎と母が1泊した」と語った。

「西遊草の道」の踏査前半はここが終点。参加した「元気・まちネット」の佐野千晶理事は「それぞれの集落の家並みが美しく、八郎の視点から見た風景を確認できて楽しかった」と笑顔を見せた。(文)鶴岡支社・伊藤哲哉、写真)同・色摩高幸

〓おわり

山形新聞

2012年8月29日

に掲載!